

教科等研究会（小・中学校特別支援教育部会）

令和２年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

子どもの姿から出発する「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

2 研究経過

	期 日	内 容	場 所
第 1 回	7 月 6 日（月）	○今年度の方針 ○研究テーマ ○活動計画 ○班別交流 (会員数 1 0 4 名)	○飯野小学校 知的障がい部会 ○嘉島東小学校
第 2 回	1 2 月 1 日（火）	○実践発表 ○事例検討	自閉症・情緒障がい部会及び 肢体不自由・難聴・病弱部会

3 研究の概要

(1) 研究の内容

①研究テーマについて

今年度の教科等研究会の全体テーマである「児童生徒一人ひとりが輝く『分かる・できる』『楽しい』授業づくり」を受け、本部会の研究テーマは昨年度に引き続き「子どもの姿から出発する『分かる・できる』『楽しい』授業づくり～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～」とし研究を進めた。「一人ひとりの教育的ニーズ」「子どもの姿から出発する」という言葉には次のような視点を込めている。

- ・子どもの興味・関心を授業づくりに生かす。 ・子どもが得意としていることを伸ばす。
- ・子どもが苦手としていることを把握し、支援する。
- ・子どもの困り感を保護者も含めて共有し、支援策を一緒に考える。

このように、子どもの特性、興味・関心、好きなもの、好きなこと等を最大限に生かしながら、課題とされることや苦手なことにも子ども自らが挑戦していけるような手立てを学び合った。

②研究の方針について

今年度の本研究会を実施するにあたって、次のような課題があった。

- ・会員数が 1 0 0 名を超え、その中には病弱児を担任されている方がおられ、感染予防に特に配慮する必要があること。
- ・今年度初めて特別支援学級担任となった先生方にとっては、新型コロナウイルスの影響で、研修の機会が減っていること。
- ・上益城郡特別支援教育研究会の担当者会や児童生徒参加の行事が中止になり、近隣の担当者同士の繋がりを持つ機会が減ったこと。

このため、以下の方針で研究会を実施した。

- ・障がい種別に大きく「知的障がい部会」「自閉症・情緒障がい部会」「肢体不自由・難聴・病弱部会」の 3 部会に分けて研修を行う。
- ・例年実施していた施設見学及び授業研究会は中止する。
- ・研修内容は 3 部会共通して先生方の実践の紹介や事例検討を行う。その際、4 人程度の班別協議とする。
- ・班別研修を通して町の先生同士がつながる機会を設定する。

(2) 成果と課題

①成果

- ・第 1 回の研究会の班別交流では初めて特別支援学級担任になられた先生方の悩みを中心に聞く時間を設けたことにより、指導上の不安感を軽減する機会となった。
- ・支援学校の先生方に助言者として協力していただいたことで事例検討の協議を深めることができた。また、支援学校の現状や指導支援の方法等、今後活かせる情報を知ることができた。

②課題

- ・今年度初めて3部会に分かれての研修会を実施したが、部会長となる校長先生がもうお一人必要となった。そこで会員ではない益城中央小学校の緒方修校長先生に自閉症・情緒障がい部会の会場長を快くお引き受けいただいたお陰で運営が成り立った。来年度の運営にあたっては組織の見直しをする必要がある。
- ・2回目の研修会の参加者が5割ほどで、1回目の研修しか参加できなかった先生方が多数おられた。子ども達がいる時間に学校を離れることが困難という理由が多数であった。研修の機会を保障する為に、夏季休業中の実施又は3部会毎に期日をずらす等の対策を検討する必要がある。また、授業を中心とした研究会の在り方の見直しや、オンラインでの講話視聴等の研修の持ち方について考える必要がある。
- ・本研究会の会員には特別支援学級担任ではない先生方もおられる。また、特別支援学級と一口に言っても子どもの実態は様々であり、日々指導支援にあたられる先生方の悩みも多岐に渡る。そのような中、先生方のニーズに十分応えるという点においては難しさがあった

4 実践事例

12月1日に行った第2回研究会では、3部会共通して前半は「実践発表」、後半は「事例検討」を行った。実践発表では、それぞれの先生方が担当している児童生徒の授業実践で取り組んでいることや、使用している教材教具、指導案等についての紹介をし合い、意見交換を行った。事例検討会では、班ごとに司会者を決め、支援策を付箋に貼っていくという流れを提示したが、付箋を使用する時間を惜しんで日頃の指導支援について班の先生方に聞いてもらい、児童生徒の実態や指導方法についての質疑応答、多角的視点からのアドバイスをもらう等、熱心に検討されていた。どの班も話が弾み、先生方の悩みの解決の一助となった。また、3部会それぞれに助言者をお招きした。事例検討では助言を希望されている参加者には事例を紙面で提出していただき、それを事前に助言者にお渡ししていたことで班別協議の際に適切な助言を頂くことができた。

以下は3部会ごとに参加者の感想と助言者の助言をまとめたものである。参加者の感想は第3回一斉研修が中止になったため、各学校にアンケートを送信し、各学校で参加部会ごとに回答していただいた。

(1) 知的障がい部会

①参加者の感想（○：成果、△：課題）

【実践発表】

- 課題の提示の仕方や、例の出し方など具体的に発表してもらったので、大変参考になった。
- 板書型指導案を紹介して頂き参考になった。
- 教材を実際に手に取って見る事ができたので良かった。また、自分が作った教材を先生方に見て頂き、自分では気付かない活用法や授業の工夫も教えて頂けてためになった。
- △授業研ではないので、子どもの姿が見えにくかった。
- △自分のグループ（4，5人程度）の話しか聞くことができなかつたため、他の班の教材についても知りたかつた。全体で共有する時間があると良かった。

【事例検討】

- 町ごとに事例を出し合い検討できたので、小中間の連携がとれて良かった。
- 助言者の先生とお話でき、アドバイスをいただいてありがたかつた。
- 担任している生徒たちのことを小学校の先生方に聞けたのがとても良かった。来年度も第1回の研究会でそのような機会を設けていただけると有り難い。
- △学校や学級の規模、児童の実態が異なるので差が大きいこともあり、議論が深まらない気がする。
- △班別だけではなく全体で検討し助言いただけるとよかつた。

②助言（松橋西支援学校上益城分教室 森野恭子先生）

- ・活発な意見交換がなされていた。
- ・先生方が児童生徒のことをよく見ておられる。
- ・支援の方法に正解はない。自信を持って取り組んでほしい。
- ・様々な視点で、支援方法を多くの場で共有する機会を持つことが大事。

- ・実態把握から目標の設定を。指導計画と支援計画の活用と職員間での共有を。
- ・小中学校の取組があって分教室に進学してくる。ありがたく思う。
- ・分教室高等部に進学する生徒の中には自己肯定感が低い生徒がいる。そのような生徒には優先する課題を決め、不要な叱責を減らしている。その子の良さを無くさないように配慮している。
- ・その子の得意な面を生かした支援、成功体験を。
- ・入学時の引継に支援方法の大きなヒントがある。活用を。

(2) 自閉症・情緒障がい部会

①参加者の感想（○：成果、△：課題）

【実践発表】

- 色々と支援してあげると子どもたちも安心することに改めて気づくことができた。
- 先生方の資料、取組を自分の実践に活用することができた。
- 子どもの実態に違いはあるものの、色々な先生方の努力や工夫を知ることができたのは良かった。
- △授業研ができなかったのは心残りだった（現状仕方ないが）。自分自身経験が少ないので、具体的な指導場面での声かけの仕方は学んでいきたいと思う。

【事例検討】

- 具体的な子どもや学級の姿を話題にできたのは非常にためになった。学習指導、進路指導についてはとても悩んでいたもので、先輩の先生方のお話を聞けてとてもよかった。
- たくさんのおアドバイスや励ましの言葉をもらうことができ、「焦らずゆっくり本人のペースで」ということも気づけたので良かった。
- タブレットを使った学習等、ICTを活用した学習の紹介をしていただき参考になった。
- △進路のことについては、詳しい情報を持った先生と話す機会があればと思った。
- △不登校生徒の進路先や将来についてもっと知りたい。
- △他校の自閉症・情緒障がい学級の先生方の具体的な取組をもっと見ることができれば良かった。

②助言（松橋西支援学校 古閑詩織先生）

- ・子どもたち一人ひとりに応じた支援、工夫がされている。
- ・子どもたち一人ひとりの実態を捉えようと試行錯誤されているのがわかる。
- ・実態把握は担任のみでなく、児童生徒に関わる全ての職員と一緒にやっていくことが大事。
- ・子どもたちは今は小さいけれど、いずれ社会へ旅立つ。そのためにも、様々な場で子どもたちが自分のこと、自分の周りのことを自分で決めていくことが大事。だからこそ子どもをどう応援していくのが重要になってくる。目に見えるものから見えないものへの選択へと進んでいく。そこを見えるようにしていくことも大事。そして、しっかりと次へと引き継いでいくことが大事。支援のつながりを。

(3) 肢体不自由・難聴・病弱部会

7月の第1回研究会の班別交流会では次のような意見が出された。

①新型コロナウイルス対策について

- ・感染予防のため、密にならないよう気を遣っている。
- ・心臓に負担がかかるためマスクを外す必要のある児童に対する周囲の理解を得る取組を行う。
- ・表情がマスクで見えない。コミュニケーションが取りにくい。
- ・行事や部活動等の削減により、仲間づくりが難しい状況。

②体育の授業について

- ・肢体不自由学級児童生徒は体育の見学が多くなるため、工夫が必要。
- ・体育参加時の支援の工夫。

③その他

- ・自立の力をつけていくことが大切。子どものやる気をどこまで引き出すことができるか。
- ・幼保等小中連携の大切さ。
- ・同じ障がい種（肢体不自由）であっても実態はそれぞれである。しかし事例を出し合う中で共通するねらいや参考になる手立てに気づくことができ有意義であった。

また、12月の第2回研究会では、肢体不自由、難聴、病弱の3つの部会に分かれて研修を行った。

①参加者の感想（○：成果、△：課題）

【実践発表】

- 自立活動構想案を持参いただき、複数の児童が交流を深めながら、どんな力を学習の中で付けていくのかがわかり、大変ためになった。
- 新型コロナウイルス感染防止のため、少人数でのグループ研修でよかった。病弱学級の子どもに、もしうつしたらと心配であったため、今後も状況に応じた取組をしていただきたい。

【事例検討】

- 中学校の先生からの事例で、小学校の間に先々の進路も見据えて、保護者と話し合っておかなければならないこと等について自覚を持つことができた。
- △少人数での話し合いなので、多角的なアドバイス、方策の提案等が十分できなかったように思う。
- △難聴学級は在籍児童生徒が少ないので、学校同士がつながれるような取組があるといいと思う。

②助言（松橋東支援学校 小川俊郎先生）

- ・中学3年生の生徒の進路指導で、普通高校か特別支援学校高等部かで悩んでいることに対して、高校卒業後の進路（企業、店舗、事業所・作業所など）をどのようにイメージするかを大切にしたい。特別支援学校進学にこだわらず、普通高校も通級指導教室等の特別支援教育に力を入れている最近の現状について話をしていただいた。
- ・児童生徒が自分の気持ちを出したことは、事実として捉えるようにしたい。それに対して「私（支援者）はこう思う。」と言った返しを大切にしたい。直接否定しないことが大事。
- ・保護者との関わりについては、開いた形での言葉かけが大事。大人が変われば、子どもも変わるという事例をもとにした経験を話された。

(4) 実践発表の例

知的障がい部会 蘇陽中学校の実践「手の巧緻性と創造性を育てる取組」

①ぶんぶんごま

インターネットサイトにある手順を印刷し、手順を見ながらコマの大きさ、形、紐の長さ等は自由に制作した。円を描く道具は筒とコンパスのどちらでも使ってよいことにした。コンパスを使う生徒が多かった。ハサミは数種類用意した。厚紙を使用したので力の弱い生徒は太めのハサミが切りやすいと言っていた。途中で制作を止めた生徒がおり、他の生徒が完成したコマを回してみたものの、うまく回すことは難しかった。また、生徒の中にはうまく回すために紐の長さをいろいろと試している者もいた。

②ワミー

作り方を参考に作る生徒と、自分で考えて組み立てる生徒に分かれた。生徒の中には組み立てることを苦手とし、組み立てたものをバラバラに分解することを好んで行う者もいた。またその生徒には本来パーツの接続部分2箇所のうち1箇所だけを繋げるという条件で1分間で何個繋げられるかという課題を出したところ、1分間で13個繋げることができた。

③アクアビーズ

1学期は作ろうとしなかった生徒は2学期にビーズ6個を使って花の模様から作り始めた。最近ではデザインの枠に従ってビーズを置くようになっている。

④プリント折り

生徒たちにお願ひ、という形で取り組んでもらった。A3の学習プリントを半分折る手順をやってみせ、30枚ずつ折ってもらった。普段は自分のプリントを折る際には雑さが見られる生徒もいるが、自分ではない誰かが使うプリントという設定だったので、雑さは少し残っていたものの丁寧に折ろうとする様子が見られた。

⑤トランプ、UNO

当初はルールが生徒によって違っており、どのルールで行うかでトラブルになり、ゲームを途中でやめた生徒もいたが、少しずつルールを自分たちで決めたことで皆で楽しめるようになり現在も時々行っている。どの生徒も皆にカードを過不足なく配ることを苦手としている。そのためまず配ろうとする意欲を褒め、配ることを嫌がらないようにしている。